

人文組織工学 A基礎理論

抽象物の構造について



抽象物構造化の目的

物の構造は分かりやすい。物の適応性も理解しやすい。五感でも理解できる。抽象は五感であり、行動であり、感情あり、思索である。これらから概念が生まれる。概念の構造は定かでない、概念の適正、社会への適応が分かり難い。

そこで、抽象物の構造化を試みた。抽象物の構造認識である。思想形成の元となる。抽象物を「物」としたのは、具象の物に対してである。抽象を物としてとらえたとき、概念の中で形が明瞭になり、思考プロセスを他と共有できるようになる。

抽象物構造の基本を6つ挙げた。これを**概念6要素**とした。

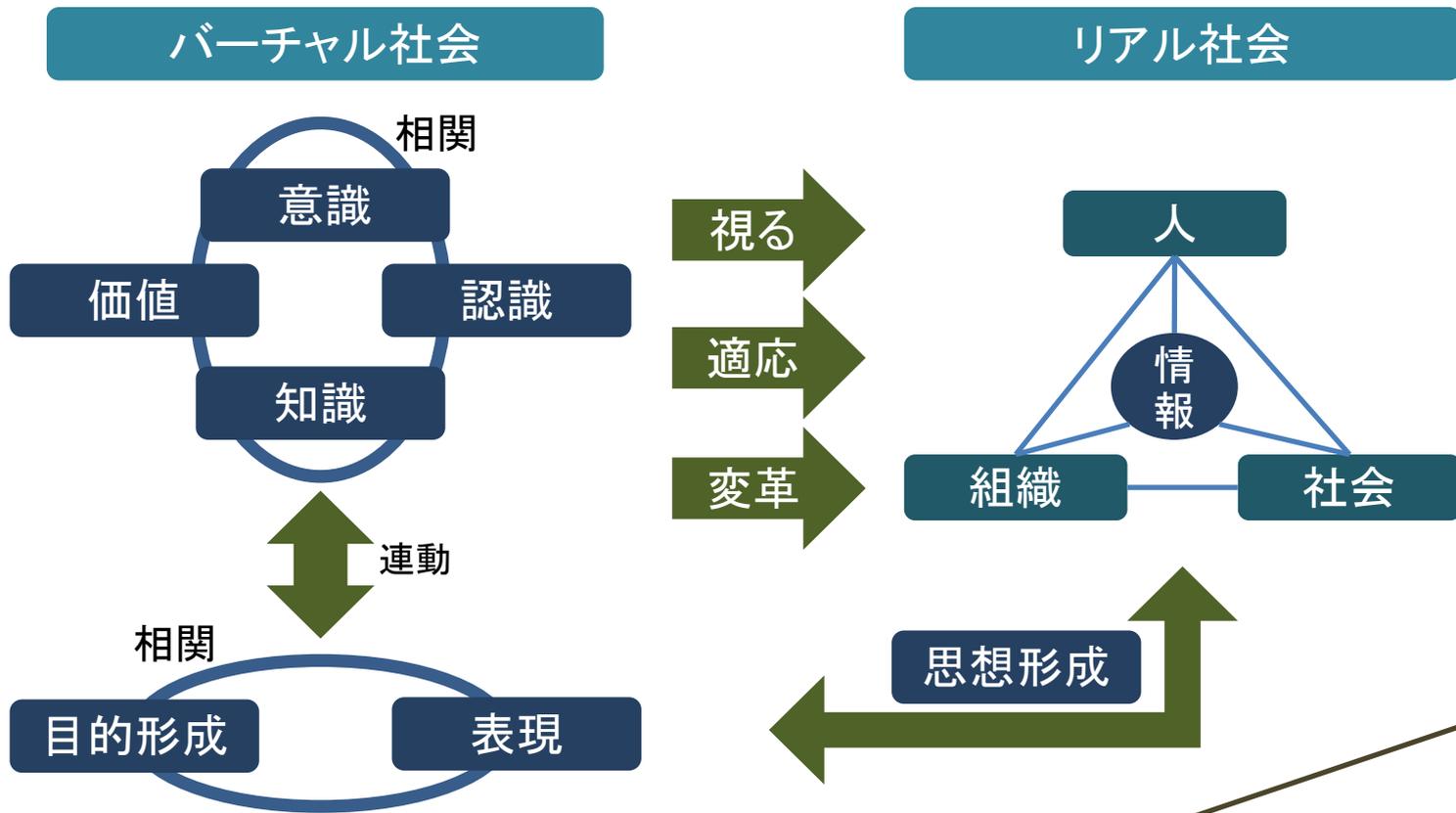
意識、知識、認識、価値、表現、目的形成の6つである。7つ目がある。思想である。思想は概念6要素によって創造される。6要素が絡む。6要素が適正に働けば、思想は適正になるし、行動も適正になる。

抽象物構造化は、適正適応が目的である。1つの概念を持ったとき、構造軸で構成される8象限(次に示す)に当てはめる。自らの概念を構造上で判断し、自らの適正と思えるところに思考を変える。おのずと社会適正への答えが出てくるはずである。

構造には3つの軸を設けた。1つの軸上では連続もしくは断続する。軸同士では断絶する。1つの軸では両極を示す。軸の両極と3つの軸の関係を求めるのも思想になる。ここでは、**動的思考**、すなわち他に対して働きかける、改善する、発展進化させる行動元となるように軸を設定した。軸の大半は言語分析《文道》で数値化できるものを前提とした。

自らの軸、もしくはここに挙げられていない概念の構造を検討してみると、判断が曖昧になる部分の明確さを見出せるだろう。

概念項目の関連とリアル社会

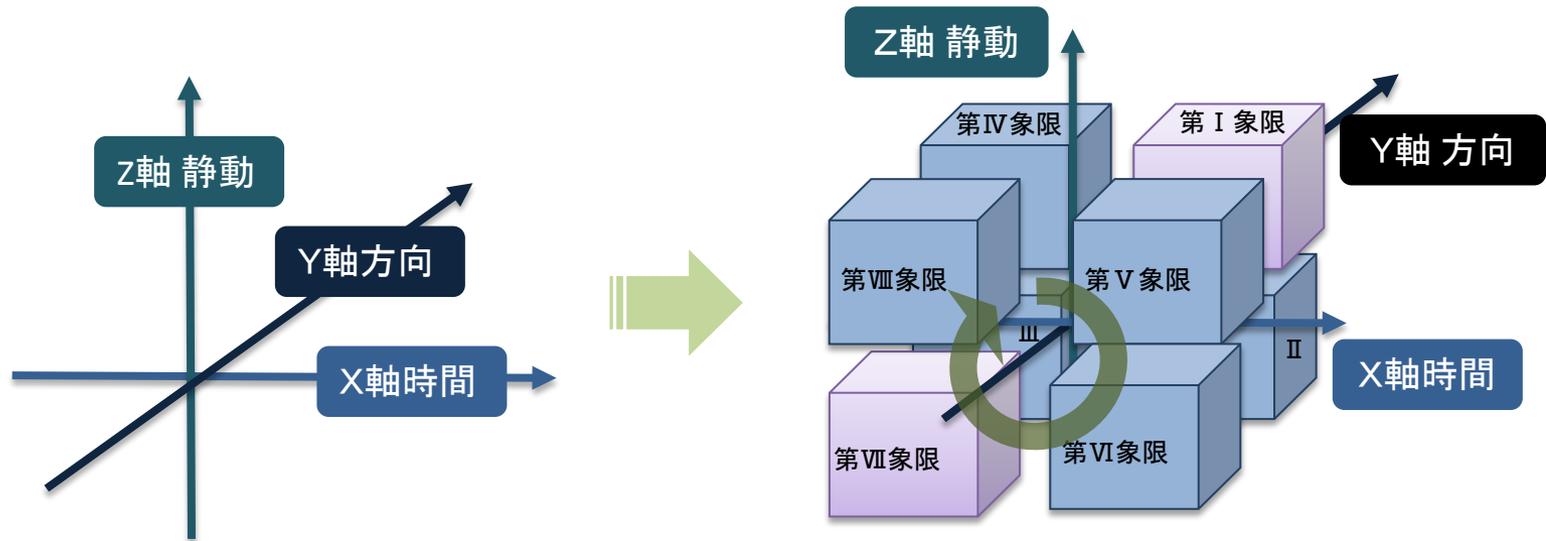


情報のインフラが、バーチャル社会を構成している。概念がバーチャル社会を動かす要因となっている。

この構造が、実社会を動かしている動力になっていく。

概念構造の形

物以外の抽象物について、意識、知識、認識、価値、表現、目的を基本にして概念構造をとらえる。



X、Y、Z軸の3つの軸を用いる。3つの軸、およそ、時間、方向、静動の範囲で設定している。

3軸の両極は相反した単語とする。

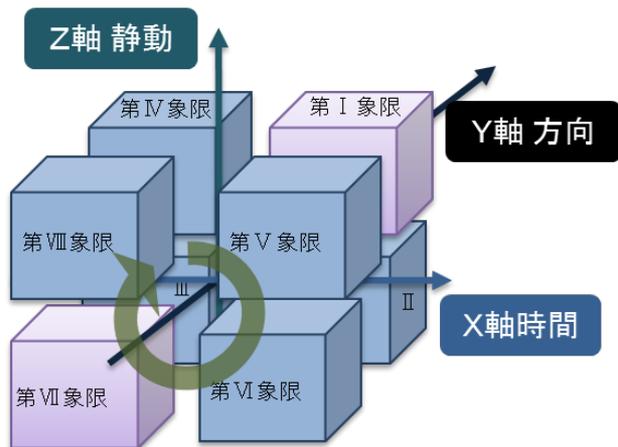
1つの軸で、両極は連続または断続する。軸の間では断絶している。

第1から第8までの8つの象限で考える。

Y軸を中心にして、後ろと前で、第1から第4、第5から第8と時計回りに象限を数える。

正の象限は第1で、負の象限が第7となる。互いに相反する。

概念項目別 軸の一覧



構造軸から見ると、発展のためには、意識、表現、目的形成は外界を見ているのが分かる。価値は思索的であれば、他との共有化が可能となる。認識と知識と価値は個に向く。

6つの構造から思想の元が生まれ、社会、外界の刺激により思想がまとめられる。刺激が連続して思想が進化し、知識が発達する。

概念項目		時間軸(X軸)	方向軸(Y軸)	静動軸(Z軸)	象限
意識	正	未来	相手	動	第I象限
	負	過去	自身	静	第VII象限
知識	正	形式知	顕在知	活性知	第I象限
	負	暗黙知	潜在知	不活性知	第VII象限
認識	正	敏感	実像	仮説	第I象限
	負	鈍感	残像	定説	第VII象限
価値	正	創造	思索	拡大	第I象限
	負	破壊	衝動	縮小	第VII象限
表現	正	未来	外言	深層	第I象限
	負	過去	内言	表層	第VII象限
目的形成	正	夢	外界	遅効	第I象限
	負	現実	内界	即効	第VII象限

概念活用適正範囲

意識	無意識	習慣的無意識	習慣的意識	意識	知覚的意識
	無意識			意識	
知識	生活習慣知識	潜在化知識	習慣的知識	意識的知識	知覚的知識
	知識活用の思考				未活用
認識	残像的認識	行動習慣認識	習慣的認識	意識的認識	知覚的認識
	前提認識 — 錯誤範囲		活用認識		
価値	絶対価値	潜在価値	習慣的価値	意識価値	思索的価値
	前提価値		行動基本		進化可能性
表現	内言表現	生活習慣表現	習慣的外言	ステージ表現	戦略表現
	静止・不活性	安定傾向表現		活性化・成長表現	
目的	必然目的	生活目的	地縁化目的	成長目的	革新目的
	前提習慣		安定志向	適応・変革化目的	

すべての概念が
同じ位置にくると



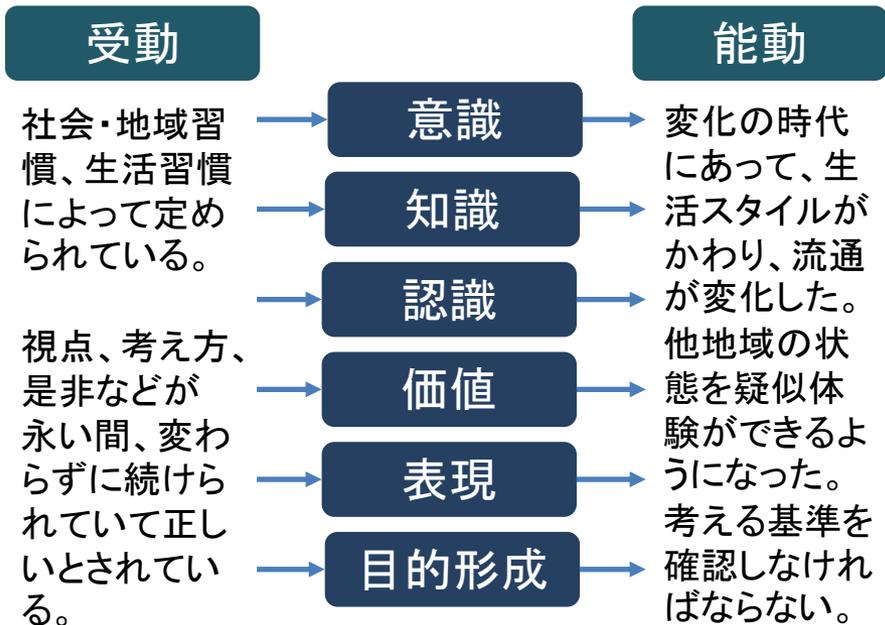
内向き姿勢が強くなる。

安定を求める傾向にある。

最も進化しやすい状態になる。

速い進化の状態であるが複雑化する。

概念姿勢を受動から能動へ



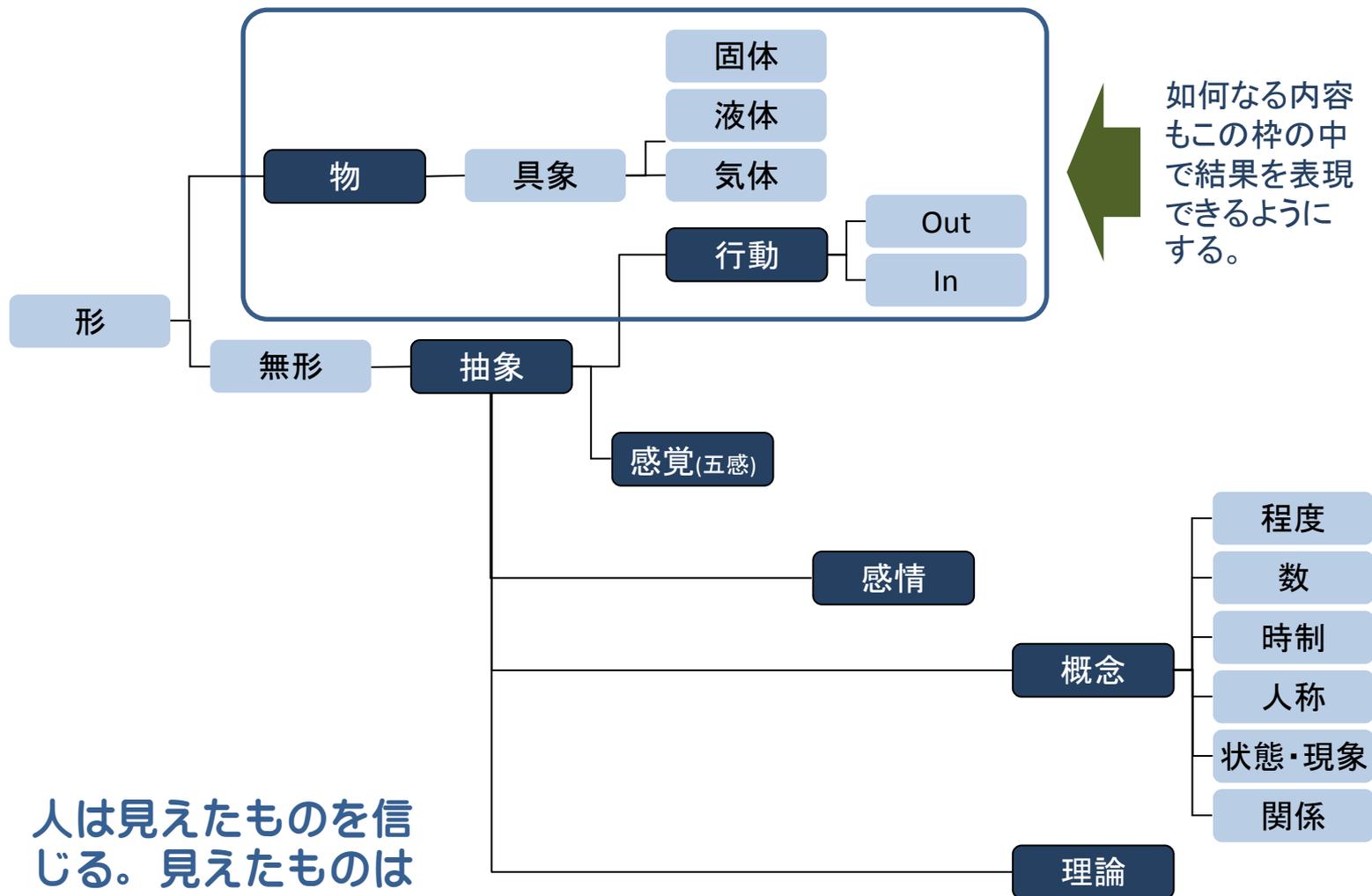
永年、同じ状態、同じ方法が行われてきた。
 その上にたって習慣行動が築かれた。受け身的概念が成立する。
 変化がなければ、同じ考え方で安定が続くが、変化のとき、能動姿勢にかえなければ、適応できなくなる。



仕事のあり様が変わらせざるを得ない。

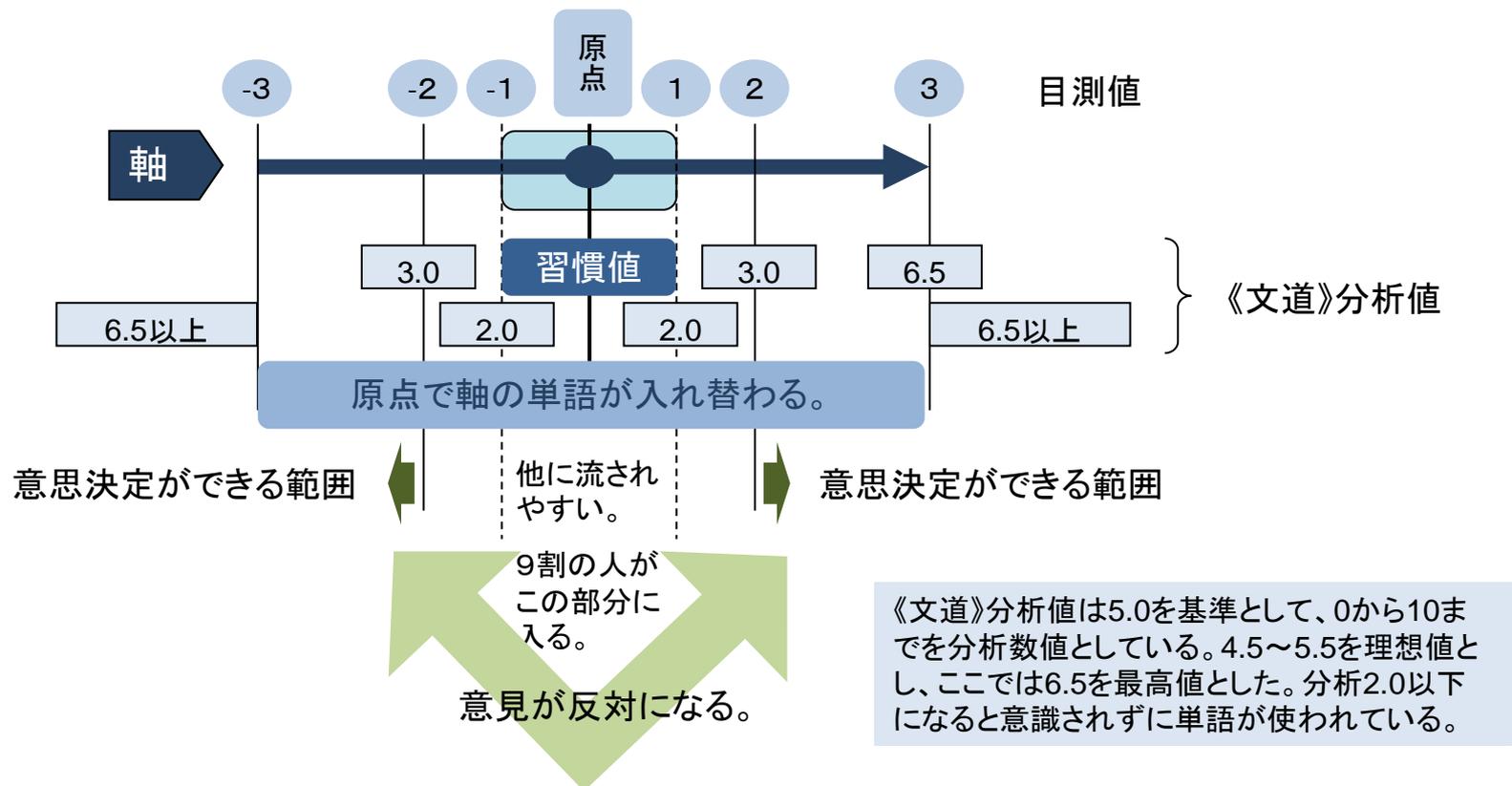


見えるものがよく分かる



人は見えたものを信じる。見えたものは残像として残る。

概念の位置を測定するための条件

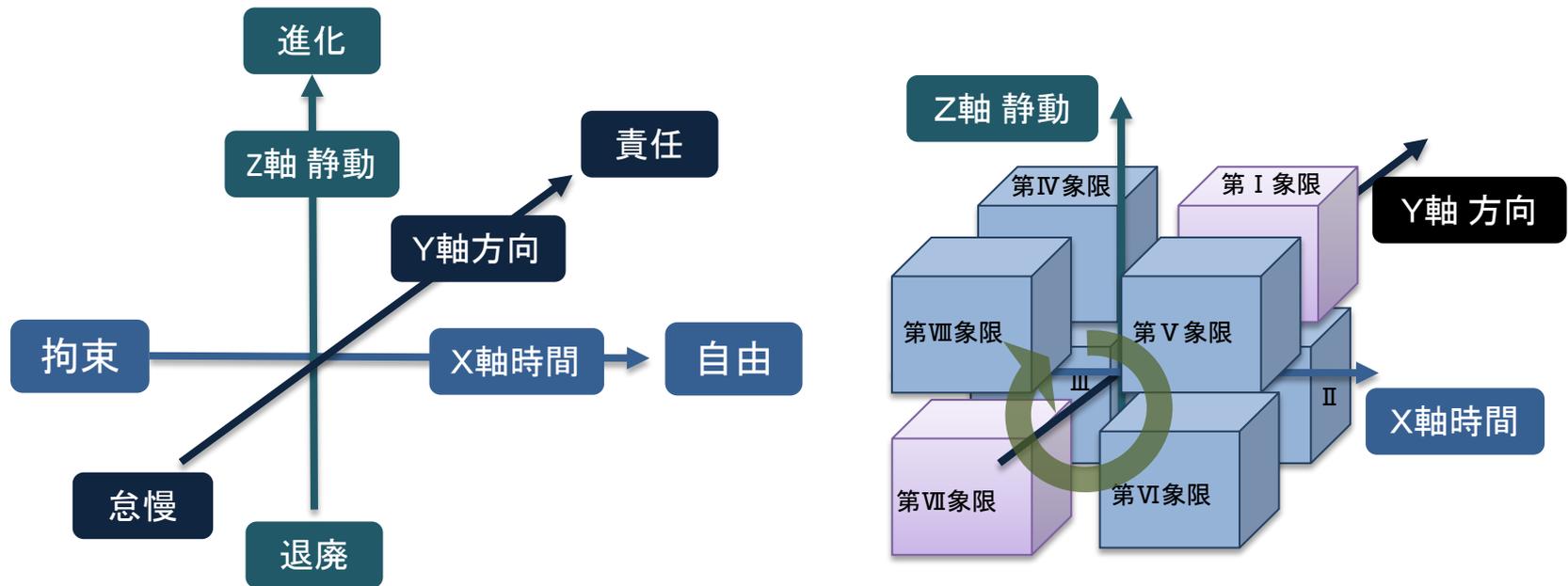


抽象物構造軸を用いての検証は3種類が考えられる。第1は第1～第8象限に当てはめる。第2はレベルを決めて丁寧な検証をする場合である。行動観察と文章の読み込みがある。上図に表した軸の目測値になる。1軸で正の方向に2段階に分類される。1象限で4分割できるので、全体では64通りの区分が可能になる。原点に近い位置にあるものは習慣値で、目測値では分かりにくい。第3は《文道》分析値を使用した場合で、1軸の正の方向に4区分できる。1象限で64通りの区分になる。分析値を用いた場合、習慣値が抽出されるので、個々の思考・行動基盤が現われる。こだわりすぎになる部分が分析値6.5以上である。日常に概念検証をする場合は、8象限のみで十分である。

社会と組織と人が発展する意識構造

社会と組織と人の発展する構造を表してみた。第Ⅰ象限にあれば活力が溢れてくる。制度が増えてくれば、自由が制限されて沈滞していく。争いは拘束感から始まる。

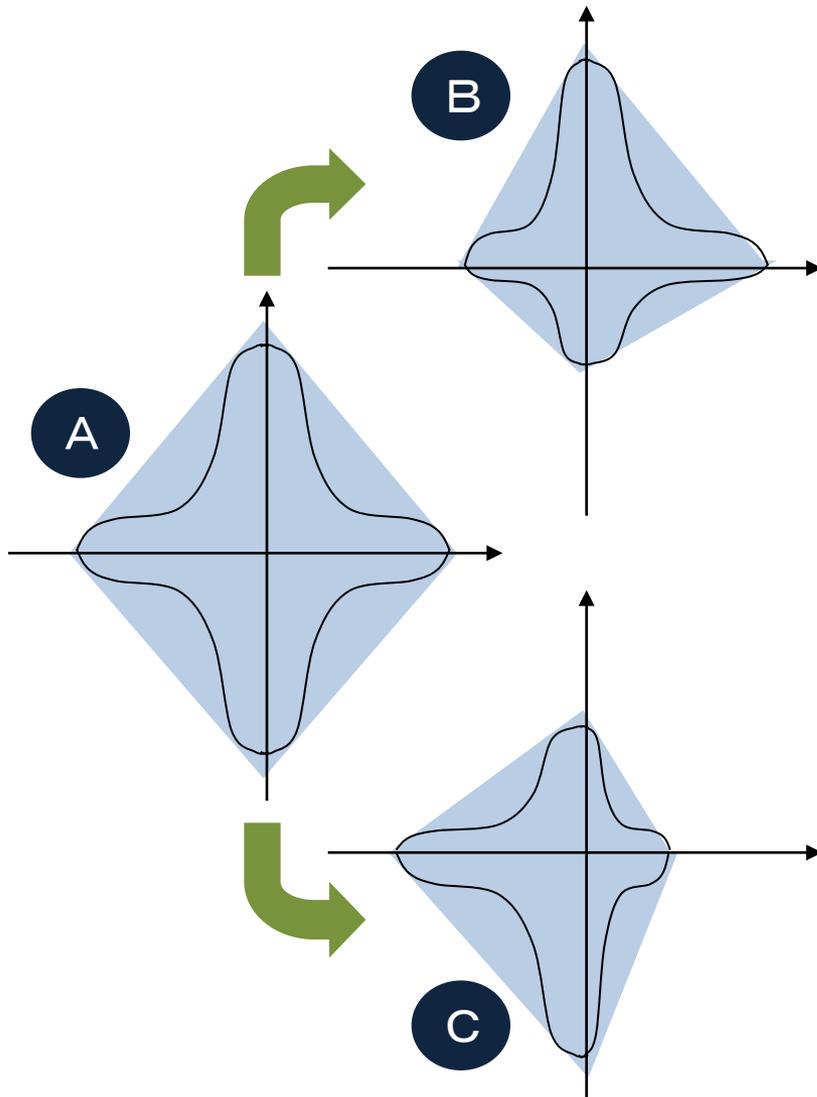
自由と責任は一对であるが、自由の中に責任が忘れられやすい。要注意である。



歴史を振り返れば、企業の栄枯盛衰をみれば、第Ⅰと第Ⅶが対比していると分かる。自らの行動の置き方で、栄枯盛衰が決まってくる。

試しに10人程度のグループで、自由と責任と進化を前提にして、他の6要素を第Ⅰ象限に思索をおいて行動すれば、半年もしないうちに成果が生まれるはずである。人の住む家は続くが、無人になった家は直ぐに廃屋になってしまう。概念も同じである。

習慣値（たゆたい）の状態



X、Y、Z軸のどれか1の軸の原点で断面図を作ったとすれば、Aの図になる。P.8の「概念の位置を測定するための条件」で表した習慣値の部分を表した。分析区分数値では、Aが通常のように思えるが、実際にはどれかが飛び出ている、どれかが原点に近づいているはずである。

習慣値がBの図になるようであれば、発展的傾向にある。Cの状態であれば周りに適合し難くなるはずである。望ましい習慣値がどのような状態であるかは分からない。仕事を積極的に進めている、または生活が活発であればBの状態になっているはずである。全力投球をしているときの知識状態は知識構造はBになる。落ち込み、やる気がない場合は、目的形成構造がCになる確率が高くなる。

構造化行為と目的

抽象物構造は概念形成を6つの要素に分類して3軸で表した。時間、方向、静動の3軸の設定の仕方で意味が変化する。

概念6要素が、どのように働かせればよいかによって、思想の形態、形成も変化する。自己実現(社会で自身が認められる要素を持ち、実践できる能力と環境を獲得)を達成する要素として軸を設けた。

社会基盤や、社会での価値が変化するとすれば、軸の意味も変化するかもしれない。自らの文化に軸が当てはまらない場合もあるかもしれない。その時は、概念6要素も含めて、各要素の3つの軸の意味を変えればよい。

意識、知識、認識、価値、表現、目的の軸構成に矛盾がなく、正と負が行動を起こす前提として成り立っているならば、軸を是としてよいだろう。考え方によって、X、Y、Z軸の両極単語は変わる。

抽象物の構造化目的は概念および思想の改善、改革である。思想イノベーションである。行動変革であり、成果への道を示す。

概念や思想の要素を構造化しておく改善・改革の要点が見える。考え違いも見える。3軸に当てはめれば、概念での改善ポイントが見えるはずである。

軸の周辺に前提となる「たゆたい」のような概念が発生する。ここが活動前のスタートとなる。思考方向を向けるときに、軸に従った注意が必要となる。

心理学との概念対比

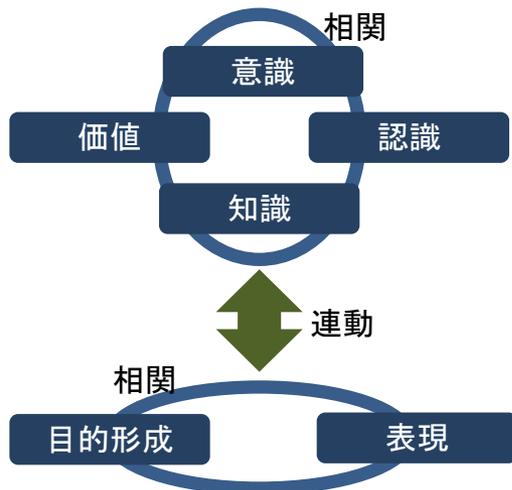
心理学で言われる概念は自然発生的に、外的環境からの影響も含めて発生する。概念が成長する。心理学では、成長に従って概念が形成されるとするが、哲学では経験概念と純粹概念を区分している。



概念構造の概念は思索概念であって、「あるべき姿」「なるべき姿」を前提する。「あるべき姿」は第 I 象限であり、他の象限は現状の状態を当てはめる。「あるべき姿」にもっていくために何を変えれば良いかの判断材料としている。心理学、哲学とは観察視点が異なっている。人文組織工学では6要素を概念要素とし、要素間の関連は、分析・観察プロセスでは考慮しない。分析結果、観察結果としての関係は成立する。

意識、認識によって知識が形成され、価値の発生によって知識の方向が変化する。価値が発生しても知識と関わりがないモノもある。知識が意識、認識に影響するのも必然である。

概念構造では自己変革、組織変革を目指す。社会変化にも影響を与える。1つ時期を切り取り、概念6要素の構造位置を測定した内容が、構造象限の組み合わせで概念が表される。それぞれの6要素は場や立ち居地によって変わる。



自らで観察する場合は心理学では自己内観と言われる。人文組織工学では、自己内観を正の意識としてとらえ、自らを変える意識とする。

左図で表すように、1時期の1つの場と1つの立場で切り取ったとき、並列の関係で表す。知識、認識、意識の範囲と程度、価値の範囲、目的形成を同列でとらえ、目的達成についての過不足を検証する。

概念要素の観察、または分析は、自己内観としても行われるが、教育、職場での活用が可能である。運用には十分な注意が必要である。

心理学でも、哲学でも、概念やここで挙げられた6要素は単独では成り立たない。外部環境におかれて発生する。外部環境は組織の一員であったり、社会での一員としての自覚であったりする。一般に社会での一員の自覚は薄い。外部からの刺激で思想が作られる。刺激知覚も6要素が影響する。